

凡例

- 一、本編は「南城市史 総合版（通史）」とする。
一、本編は、先史時代から現代までの南城市の自然および、歴史について概説的な内容をまとめたものである。
一、南城市は二〇〇六（平成一八）年一月一日に、旧四町村（佐敷、知念、玉城、大里）が合併誕生して間もなく、市民においては南城市の歴史（旧四町村包括）の認識の共有と帰属意識・アイデンティティの確立が求められておる。こうした課題解決に役立てるために本編は発刊された。

一、「章立て」については左記のとおりとした。

- 第一章 南城市の自然
第二章 先史時代の南城市
第三章 古琉球時代の南城市
第四章 近世の南城市
第五章 近代の南城市
第六章 戦後の南城市
特別執筆「旧四町村九八年を顧みる」（四編）

また、各章・項目の執筆者名は各章の扉に、「章目次」とともに記載した。

一、できるだけ文体・表記の統一を図ったが、個々の執筆者の意図を尊重し、各章間における文体・表記の揺れも許容した（特に方言読みや振りがな）。

一、用字・用語の表記や読み方については基本的に最新刊行物の表記に従ったが一部の史跡名等については、文化庁の指定文化財名称等を用いたため、表記に不統一なところもある。

一、漢数字表記については誤読を避けるため、「一一、一二、一三」とはせず「十一、十二、十三」としたが、三桁以上については「一二二

南城市『総合版（通史）』

ごあいさつ 南城市長 古謝 景春 3
発刊のことば 南城市教育長 高嶺 朝勇 4
南城市史総合版（通史）を仕上げて 南城市史編集委員会 宮城 鷹夫 5
凡例 6

第一章 南城市の自然

一 気象 イワサキクサゼミと霧 14
二 海洋 イノーと砂嘴 15
三 地形 16
(一) 台地と丘陵 16
(二) 水系と湧水 17
(三) 洞穴―水は闇の彫刻師 18
四 地質 19
(一) 土地のつくり 19
《コラム1》沖繩の地層・クチャ 21
(二) 火山と高山の証し―新里凝灰岩層 21
《コラム2》沖繩の地層・ニービ 22
(三) 昔むかしのサンゴ礁―琉球石灰岩層 23
(四) 地すべりと巨大岩塊 24
(五) 地層のひずみ―フィッシャー 26
《コラム3》鳥尻の巨大ギョロ目魚 27
(六) 土から生まれでた黒い岩球―マンガン塊 27
五 地質と植生 28
(一) 山原山と斎場御嶽 28
(二) ハマジンチョウと藻類 30
《コラム4》「久高は神の島」が自然を守った 31

三」とし、四桁についても半角コンマ（、）を入れて「一、二三四」などとした。ただし、西暦についてはコンマを入れず通常の表記とした。

一、書名等の表記については、一部、略称・通称を用いたところもある。

一、図版・写真キャプションについては、原則としてタイトル（太字）の説明、所蔵先・提供者名の順に記した。所蔵先・提供者名のないものは南城市または執筆者の収蔵・提供となっている。また、原則として絵画・陶磁器等については「蔵」とし、その他は「提供」とした。

一、本編は南城市の歴史を広く市民に理解してもらうとともに、市外の方々にも広く紹介するという趣旨を以て作成された。このため以下のような点に特に留意した。

- (1) 専門用語や難解な漢字・用語には中学・高校生向けの書籍等を参考にして、努めて振りがなを付けた。
(2) 振りがなは原則として各章の節・項の初出に付した。また通常はひらがなを使用した。方言読みや外国の地名などについてはカタカナ表記とした。
(3) 難語句については用語下の（ ）内に説明を付した。また、特に必要な語句については見開きページの左スペースに、文体や記述内容を損なわないよう配慮して、注釈を付した。

一、参考文献については、各章・項目末尾に適宜掲載したが、特に旧四町村で発刊された既刊の町・村史等と、左記の文献は事務局校正時の段階で、全体に渡って参考にした。

- ・『沖繩県史』各巻（沖繩県教育委員会）
・『概説 沖繩の歴史と文化』（沖繩県教育委員会）
・『沖繩大百科事典』（沖繩タイムス社）
・新城俊昭「新訂・増補版 高等学校 琉球・沖繩史」（東洋企画）

一、情報提供、写真・資料提供等の協力機関・協力者については、図版キャプション部分に記し、また巻末に一覧できるようにした。

第二章 歴史のはじまり

一 歴史の舞台としての南城市 34
二 先史時代の沖繩 36
(一) 化石人骨 36
(二) 沖繩の最も古い土器文化 38
(三) 先史時代の南城市 44
1 南城市最古の土器文化 44
2 三千数百年前ころの南城 46
3 二千数百年～千数百年前ころの南城 47
4 二千年～千数百年前ころの南城 48
《コラム1》石灰岩洞穴に化石人骨を追え 51
《コラム2》土器の型式と考古学 51
《コラム3》小さな島に華開いた貝塚文化 52
《コラム4》先史時代の墓 53

第三章 古琉球時代の南城市

一 古琉球の成立と展開 55
(一) 古琉球とは 56
(二) 古琉球の範囲と特徴 56
(三) 古琉球の成立の流れ 57
(四) オモロと古琉球の南城市 59
二 グスク時代の南城市 62
(一) グスク時代の沖繩―その概観と特徴 62
1 グスク時代の前史 62
2 グスク時代 63
3 グスクの立地 64
4 グスクから発見される遺物 64
(二) グスクが語る南城のあゆみ 65
1 南城市のグスク 65
2 グスクの調査 67
3 グスクを読み解く 71
《コラム1》世界遺産のはなし 73 《コラム2》縄張り 74
《コラム3》グスク、城、チャシ 74

三 三山統一と南城市

- (一) 三山とは—その由来について
- (二) 史料に現れた三山王国
- (三) 三山王国

四 琉球王国の成立と南城市

- (一) 琉球王国とは
- (二) 琉球王国と尚円王—真の意味での王国の確立—
- (三) 尚真王の政治—古琉球の黄金時代—
- (四) はじめに—オモロに南城市をたずねるのはなぜか—
- (五) オモロにみる南城市

- 1 統一への流れ
- 2 島添大里城を攻める
- 3 中山王武寧を攻める
- 4 北山王を討つ
- 5 南山王滅ぶ
- 6 尚巴志を如何に理解するか
- 1 尚円王の経歴
- 2 護佐丸・阿麻和利の乱を見る
- 3 尚円王の政治
- 1 中央集権の確立
- 2 尚真王の宗教政策
- 3 外交政策
- 4 古琉球時代の南城市
- 1 地域史とオモロ
- 2 オモロと『おもろさうし』
- 3 南城市のオモロを収録する『おもろさうし』の巻々
- 1 南城市のオモロに謡われた土地と神と人
- 2 佐敷地域のオモロ
- (1) オモロに見える佐敷の地名
- (2) 佐敷のオモロに謡われた神・神女・人
- (1) オモロに見える知念の地名
- (2) 知念のオモロに謡われた神・神女・人
- 3 玉城地域のオモロ
- (1) オモロに見える玉城の地名

三 近世期の南城市

- (一) 地方制度の仕組
- (二) 島尻方と東四間切
- 1 七代官制(古琉球—近世初期)
- 2 四代官制(一六六〇—一七二八年)
- (三) 東御廻り
- (四) 地頭と間切の関係
- (五) 農村社会の仕組
- 1 百姓の負担(租税)
- 2 間切番所役人の職務内容
- 3 乾隆検地にみる耕作地の増加
- 4 王府時代の南城市
- (1) 佐敷間切
- (2) 知念間切
- (3) 玉城間切
- (4) 大里間切
- (六) 開得大君の御新下り
- (七) 貧しい農民の暮らし
- (八) 救荒食物としてのソテツ
- (九) 鳥尻方の「歴史の道」
- (一〇) 『球陽』にみる東四間切の人物
- (一一) 『コラム7』奥武島観音堂
- 四 新しい時代の序曲
- (一) 欧米船の来航
- (二) 史料6—一八四四年の外国船来航に関する「廻文」
- 1 漂着中国人への対応
- 2 仏船への薩摩・幕府の対応
- 3 ペリーの来航と日本の開国
- (三) 史料7—ホール大佐に対するペリーの批判
- (四) 『コラム8』牧志朝忠

第四章 近世の南城市

- 一 薩摩島津氏の琉球侵略
- (一) 薩摩の侵略
- (二) 薩摩の琉球支配
- (三) 「江戸立」と琉球の地位
- (四) 薩摩藩と王府の財政
- (五) 薩摩支配下における中国への進貢の意義
- (六) 明・清交代期の琉球
- 二 近世琉球の仕組
- (一) 羽地朝秀の政治改革
- (二) 近世琉球の政治組織
- (三) 身分制度の確立
- (四) 家譜の作成と名字
- (五) 法典の整備
- (六) 蔡温の政策
- (一) 藩政から県政への「世替わり」
- 二 新生「沖繩県」となる
- (一) 置県、四つの異なる社会
- (二) 廃藩置県前後の行政
- (三) 土地整理と屋取の構造
- (四) 町村制と納税の強化
- (五) 農事奨励の原山勝負
- (六) 産業、興せど振るわず
- 三 戦前の交通事情
- (一) 劣悪な交通状況
- (二) 交通の大革命「軽便鉄道」
- 四 沖繩県民と戦争
- (一) 日清戦争と「公会」運動
- (二) 馬天港にタングラ
- (三) 徴兵制度への抵抗
- (四) 軍事体制の強化と組織
- (五) 日中戦争から太平洋戦争へ
- 五 南城市の教育
- (一) 近代の教育事情
- 1 廃藩置県以前の教育
- 2 廃藩置県以後の教育
- 3 近代の社会教育
- (二) 学校教育と社会教育
- 1 南城市の学校教育
- 2 南城市の社会教育
- 六 沖繩の民芸運動と民衆
- (一) 沖繩民芸への目覚め

第五章 近代の南城市

- 4 ペリー艦隊と東四間切
- (一) 史料8—「亜船来着二付那覇二て之日記」
- (二) 『コラム9』喜舎場朝賢
- 一 前章・沖繩の変革
- 二 戦前の交通事情
- (一) 劣悪な交通状況
- (二) 交通の大革命「軽便鉄道」
- 四 沖繩県民と戦争
- (一) 日清戦争と「公会」運動
- (二) 馬天港にタングラ
- (三) 徴兵制度への抵抗
- (四) 軍事体制の強化と組織
- (五) 日中戦争から太平洋戦争へ
- 五 南城市の教育
- (一) 近代の教育事情
- 1 廃藩置県以前の教育
- 2 廃藩置県以後の教育
- 3 近代の社会教育
- (二) 学校教育と社会教育
- 1 南城市の学校教育
- 2 南城市の社会教育
- 六 沖繩の民芸運動と民衆
- (一) 沖繩民芸への目覚め

七 南城市の民俗文化

前章・南城市の民俗信仰と祭事

(一) 東御廻りと門中

(二) 久高の祭事「イザイホー」

(三) 古堅のミーミンメー

(四) 仲村渠の親田御願

(五) 手登根の古式エイサー

(六) 東方地域の獅子舞

(七) 東方綱曳の特色

八 南城市の移民

―はじめに―

(一) 旧大里村の移民

1 旧大里村における字別、国・地域別移民状況

2 旧大里村からの戦後移民

(二) 旧玉城村の移民

1 旧玉城村における字別、国・地域別移民状況

2 旧玉城村からの戦後移民

(三) 旧佐敷町の移民

1 旧佐敷町における字別、国・地域別移民状況

2 旧佐敷町の字別移民状況

(四) 旧知念村の戦前移民

1 旧知念村の戦前移民

2 旧知念村の字別、国・地域別移民

(五) 南城市の移民形態

1 ハワイ移民

2 アメリカ合衆国移民

3 ベルギー移民

4 ブラジル移民

5 アルゼンチン移民

6 フィリピン移民

第六章 戦後の南城市

一 収容所からはじまった戦後

(一) 当時の主な各区の状況

1 久手堅区

2 山里区

3 志喜屋区

4 具志堅区

《コラム1》知念半島で芽生えた祖国復帰への道

(二) 各避難収容所にいち早く出来た学校

1 久手堅初等学校

2 知念初等学校

3 具志堅初等学校

4 山里初等学校

5 志喜屋初等学校

6 百名初等学校

7 玉城初等学校

8 船越初等学校

9 大里初等学校

10 大城初等学校

11 知念高等学校

(三) 学制改革と戦後の教育行政

《コラム2》青空教室とガリ刷り教科書

二 沖繩諮詢会の設置と知念市の誕生

(一) 沖繩諮詢会

(二) 知念市の誕生

(三) 北部避難地区からの帰村

三 南城市の戦後復興

(一) 旧四町村の終戦直後の状況

1 旧佐敷町

2 旧知念村

3 旧玉城村

4 旧大里村

(二) 戦後復興期の南城市

1 秘密基地(CSG)知念キャンプの設置

《コラム3》琉米親善委員会の設立

2 南城市にあった軍政府と沖繩民政府

3 南城市で芽生えた戦後民主主義の政治

四 「大太平洋の要石」となった沖繩

(一) 島ぐるみ闘争

(二) 米軍支配下の沖繩の自治権

(三) 米軍支配下の基地被害

《コラム4》米軍の財政援助の実態

五 祖国復帰運動

(一) 平和憲法のもとへの「祖国復帰運動」

《コラム5》ベトナム戦争と沖繩

(二) 復帰前夜の沖繩の状況

《コラム6》コザ反米事件

(三) 戦後～復帰前の人的・文化的交流

1 沖繩と日本本土の文化的交流

(1) 沖繩の文化的黄金期

(2) 作家たち

(3) ジャーナリストの交流と琉球文化の第二黄金期

2 南城市をめぐる交流と芸術活動

(1) 美術家たちの沖繩

(2) 岡本太郎と久高島

(3) 大城皓也の琉球文化への目覚め

3 沖繩出身詩人・山之口獏と復帰問題

六 復帰後の南城市

(一) 「七二年返還」決まる

1 戦後初の国政参加

2 ドル問題

3 沖繩国会

(二) 不安・不満の世替わり

1 沖繩振興開発計画

2 自衛隊配備

(1) 南城市の自衛隊

(2) 南城市の基地返還

3 復帰後初の知事選挙

4 国際海洋博覧会

(三) ヤマト化進む

1 交通方法の変更

2 保守県政誕生

3 沖繩戦と教科書検定

《コラム7》外圧が味方に

(四) 復帰一〇年

1 日の丸・君が代

2 海邦国体

(五) 昭和から平成に

(六) 世界のウチナンチュ大会

(七) 県民の怒り噴出

1 10・21県民大会

2 基地で県民投票

3 平和の礎「除幕」

4 教科書問題が再燃

(八) 旧四町村の主な出来事

1 一九七二～一九七九年

2 一九八〇～一九八九年

3 一九九〇～一九九九年

4 二〇〇〇～二〇〇五年

七 南城市の誕生

(一) 四町村が合併

1 合併の経過

2 「新市建設計画」

(1) 四町村「現状と課題」

《コラム8》幻の「東方市」

(二) 地域別の整備

(1) 新生南城市

【南城市市民憲章】

1 産業

(1) 観光の振興

《コラム9》畜場御嶽が危ない

(2) 農業の振興

① 産地の指定

② 農業人材

(3) 畜産業の振興

(4) 水産業の振興

2 福祉・健康

(1) 児童福祉

(2) 高齢者福祉

(3) 障害者福祉

(4) 社会福祉協議会

(5) 健康づくり

《コラム10》「メタボ」退治

(6) シルバー人材センター設立

(7) 市立保育所を民営化

3 文化

(1) 文化財

(2) 世界遺産

(3) 人間国宝

(4) 市史編集事業

(5) 伝統芸能・行事

(6) シュガーホール

4	教育の振興	334
(1)	海外短期留学制度	334
(2)	「弁当の日」実施	335
5	交通・通信	335
(1)	南城市の道路	335
(2)	ハイビスカスネット	335
(3)	高速・無線インターネット	336
6	南城市の主なイベント	336
(1)	うぶざとヌムーチーさい	336
(2)	尚巴志ハーフマラソン	337
(3)	国際ジョイアスロン	337
(4)	視覚障害者マラソン沖縄大会	338
(5)	チャレンジデー	338
7	南城市議会	339
	市議会の主な意見書・宣言等	339
8	その他	340
(1)	南城市が「景観行政団体」	340
(2)	高千穂町が姉妹都市に	340
(3)	陸上競技大会	341
(4)	南城市の不発弾対策	341
(5)	選挙	342
	【市町村長】 【県議会議員】 【国会議員】 【県知事】	
	特別執筆 旧四町村九八年を顧みる	345
一	豊かな「ムラ」の成り立ち	
(一)	「佐敷間切」から「佐敷村」への変遷	346
(二)	「津波古ムラ」賑わう里の港町	346
(三)	「小谷ムラ」精巧な技の竹細工村	347
(四)	「新里ムラ」歴史の足跡いま残す	347
(五)	「兼久ムラ」砂地の里の美しさ	348
(六)	「佐敷ムラ」村の中心歴史積む	348
(七)	「手登根ムラ」民俗文化の古き里	349
(八)	「伊原ムラ」明媚なシユクナ森の麓	349
(九)	「屋比久ムラ」養蚕興しの先進地	350

(九)	【外間ムラ】原山勝負の見せどころ	350
(一〇)	【仲伊保ムラ】海辺を前に屋取る里	350
(一一)	【富祖崎ムラ】マースで知られた民かまど	351
(一二)	商業地域としての【新開】	351
(一三)	佐敷高台の景勝地【つきしろ】	351
二	旧知念村の今昔と村政九八年の回顧	352
(一)	焼畑(きなわ)・「知念」と稲作発祥伝承	352
(二)	久高島参詣と斎場御嶽の御新下り	352
(三)	道路の変遷	354
(四)	学校の始まりと終戦前後の教育事情	355
(五)	間切番所と村政九八年	356
三	旧玉城村政九八年を顧みる	358
(一)	旧玉城村の前身と間切の起原	358
(二)	二八代も続いた歴代村長	359
(三)	旧玉城村政の中で記憶に残る印象的な話題	359
(四)	玉城村出身、戦前の政治家	362
四	大里村の集落名と字名	364
(一)	地割制度と農民のくらし	364
(二)	集落の統合	366
(三)	村議会異聞	367

索引	370
協力機関および協力者	381
編集委員・専門委員・事務局名簿	382
編集後記	383

第一章 南城市の自然

一	気象	イワサキクサゼミと霧	大城逸朗
二	海洋	イノーと砂嘴	
三	地形		
四	地質		
五	地質と植生		

